

博士学位論文審査要旨

氏名	蒋 明 超			
学位の種類	博士（歴史民俗資料学）			
学位記番号	博甲第 280 号			
学位授与の日付	2021 年 3 月 31 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
学位論文の題目	石敢當の比較研究 — 中国・沖縄・鹿児島・奄美を中心に —			
論文審査委員	主査	神奈川大学	教授	佐野賢治
	副査	神奈川大学	教授	小熊誠
	副査	神奈川大学	教授	周星
	副査	東京都立大学	教授	何彬

【論文内容の要旨】

東アジアや東南アジアの諸国には、辟邪のために家の前面や路傍に祀られた石塔「石敢當」が分布する。発祥地の中国以外で最も多くの「石敢當」が分布するのは日本で、中でもその 9 割以上が旧薩摩・琉球地方に存在する。本論は、中国本土で密な分布を示す山東省と福建省、日本の沖縄、鹿児島県に所在する周知のすべての「石敢當」を現地で調査、および関係する史料検索により、現時点での石敢當関係史資料の集成をし、その伝播経路を検討、当該地での受容の経過と信仰内容を比較し、「石敢當」の一次的性格を明らかにした上で、派生した信仰内容の分析から「石敢當」の示す民族性、民俗性（地域性）を全 9 章の構成で論じる。以下その概要を記す。

第 1 章「石敢當」誕生推論では、紀元前 40 年頃の『急就篇』に記載された「石敢當」の文字は史游が創造した人名で、石造物との直接的な関係は認められず、「石敢當」の刻字が呪力を示し、石造物に取り入れられた契機は、唐代の学者、顔師古の『急就篇注』に求められる。

第 2 章「石敢當」と「泰山石敢當」の異同では、筆者の郷里、山東省泰安市岱岳区西南望村の現地悉皆調査から、石敢當には、「石敢當」と「泰山石敢當」の二種の刻銘があり、それぞれ現存する最古の事例も含めその異同を分析する。「泰山石敢當」は「石敢當」に含まれるが、泰山信仰の性格が色濃く認められる。

第 3 章 中国北方と南方における「石敢當」の比較研究 では、「石敢當」発祥地である福建省、「泰山石敢當」発祥地である山東省泰山地域における現地調査も含め、両者の比較研究を行った。中国北方の石敢當はほとんど「泰山石敢當」であり、泰山信仰の色彩が強い。一方、中国南方では「石敢當」と「泰山石敢當」が併存するが、石敢當の由来を知る人はほとんどおらず、両者の異同も特に言わず、混同している。

第 4 章 日本における「泰山石敢當」の受容 では、日本における「泰山石敢當」の受容に注目する。鹿児島・宮崎県（旧薩摩藩領）、沖縄県（琉球王国）だけに「泰山石敢當」は分布し、その受容には風水師が介在し、またノロ（神女）や中国からの冊封使団の関与がうかがわれる。鹿児島県には四角柱形の「泰山石敢當」、沖縄県には自然石及び梵字が刻まれた「泰山石敢當」が残るなど地域差も見られる。

第 5 章「閩人三十六姓」と琉球の「石敢當」受容 では、「閩人三十六姓」と琉球の「石敢當」

受容との関係を、「閩人三十六姓」の繁栄や衰退と絡めて、その伝来や普及を論じる。琉球の「石敢當」受容には、「閩人三十六姓」の子孫の大きな影響力があったが、それにも増して、琉球王府の「新唐栄人」、特に風水思想の重視と風水師の重用が主たる要因と指摘する。

第6章 物からみる琉球（沖縄）の「石敢當」受容 では、琉球王国時代から敗戦、米軍占領期や日本復帰以来祀られてきた、各時代における「石敢當」受容の状況を論じる。王国時代の「石敢當」の普及には、王府派遣の風水師が大きな役割を果たした。戦後の一時期は風水師に替わり、ユタ・カムカカリヤー・ムヌチリ・三世相などのユタ的職能者の関与が大きかった。日本への返還以降、訪問販売により、「石敢當」設置の風潮が盛り上がった。近年沖縄では、ユタ的職能者に相談、指導を受けることもなく、個人的に「石敢當」を購入、魔除けとして場所を限定せず設置する流行が見られる。

第7章 薩摩の「石敢當」の中国伝来の可能性—倭寇や唐人町を中心に—では、従来、薩摩の「石敢當」は琉球侵攻後に、琉球王国から伝来したと考えられてきたが、南九州における倭寇活動や薩摩藩内の唐人町形成に着目し再考する。薩摩藩時代の「石敢當」は、唐人の活動地区に分布している。薩摩に唐人町が形成されたのは戦国期から江戸初期であり、琉球侵攻以前、「石敢當」は既に渡来した唐人により薩摩に伝えられていたと考えられる。

第8章 物からみる旧薩摩領の「石敢當」受容 では、旧薩摩藩領に存在する「石敢當」を石造遺物として検討する。薩摩藩内の唐人町や唐人居住地には、他の藩地区より多くの「石敢當」が分布し、刻字から伝来の初期には仏教関係者が大きな役割を果たしたことがうかがわれる。西南戦争以後の士族階級の消滅、戦後に行われた道路整備の影響などを受けて、「石敢當」の数は大幅に減少する。現存する多くの「石敢當」は明治期以前の遺物である。

第9章 奄美諸島の「石敢當」受容—喜界島・奄美大島・徳之島を中心として—では、奄美諸島に存在する「石敢當」の受容を現況の比較から解明する。石造物としての特徴からみると、奄美の石敢當は外部から持続的に伝来、その起源を遡れば、琉球侵攻以前の琉球や中国からの伝来の可能性が考えられる。薩摩藩支配下の奄美には薩摩風の石敢當が伝わるが、その一方で、琉球からの影響が途絶えたとはいえない。沖永良部島や与論島の「石敢當」は、琉球（沖縄）から受けた影響が大きい。これら以外の奄美諸島において、各島の「石敢當」受容には地域差が認められる。

以上、中国・鹿児島（と宮崎）・沖縄・奄美などの「石敢當」の比較を通して、琉球侵攻以前から、薩摩、琉球ともに中国から「石敢當」が伝来していた状況が明らかになった。東南アジアの諸国と同様に、「石敢當」は中国から海外各地の唐人町や唐人居住地に放射線のように伝播した。琉球侵攻以降の薩摩には、中国のほか、実質的に支配した琉球からの「石敢當」伝播も始まった。奄美諸島には、琉球風の「石敢當」や薩摩藩内の山川産石材を使った古い「石敢當」が残るが、伝来地は現段階では不明である。

次に、信仰民具としての「石敢當」の比較から、中国・旧薩摩藩領・沖縄・奄美における「石敢當」の受容の異同を見る。刻字については、旧薩摩藩領や沖縄では、大部分が「石敢當」の三文字である。ただし、旧薩摩藩領には「石敢當」のほか「石散當」も数多く存在する。一方、中国本土においては、圧倒的に「泰山石敢當」の五文字が多い。特に中国北方では、ほぼすべて「泰山石敢當」である。「石敢當」の分布密度では、中国山東省・沖縄県・喜界島の分布密度はともに高い。これに対し、中国福建省・奄美大島・旧薩摩藩領の大隅や日向地区の分布密度は低い。九州では旧薩摩藩領以外の宮崎県・熊本県には、「石敢當」は現存しない。

また、中国北方の「泰山石敢當」には、「鎮宅」「鎮宅之宝」の文字が見られるが、中国南方、旧薩摩藩、沖縄では全くない。一方、中国南方の「石敢當」には、八卦・太極図・獅子像・獅子面・虎面などが見られるが、旧薩摩藩領の「石敢當」には、このような符や像を刻したものは全く認め

られない。沖縄の各地では獅子像・獅子面が多く見られ、加えて、梵字が刻された「石敢當」「泰山石敢當」や、水字貝などとセットになった「石敢當」も認められる。設置場所からみると、中国北方・旧薩摩藩領では「石敢當」「泰山石敢當」は高い位置に設置され、これに対し、中国福建省・沖縄の「石敢當」は常に低い位置に設置される。「石敢當」の素材、形態から見ると、琉球の伝統的「石敢當」は自然石を用いたものが多く、現代沖縄社会では表札型のものも多くみられる。薩摩の「石敢當」は、将基型（屋根型）に特徴があり、九字が刻されるのは奄美独自といえる。

このような「石敢當」の刻字、形態の異同が生じる要因として宗教職能者の関与が考えられる。中国北方では、道教や泰山信仰はじめとする民俗信仰、「姜太公在此」など「鎮宅」文化と深く関わり、中国南方では道教風水の関与が強く認められる。文化大革命期には風水師など宗教職能者が弾圧され、以後、新しく「石敢當」を作ることは少なくなった。沖縄では、風水師はじめ、ユタ、カムカカリヤー、ムヌチリ、三世相などの関与が指摘でき、琉球固有信仰の影響も反映している。旧薩摩藩に「石敢當」を伝えたのは、概ね渡来唐人・琉球人であったが、普及に力あったのは、薩摩藩の武士層であった。西南戦争以降、武士階層が消滅、「石敢當」の造立も次第に少なくなった。奄美諸島の「石敢當」は自然・人文環境の相違により、地域差が見られる。「石敢當」造立が昔から盛んだった喜界島では現在でも造立ブームが続き、鬼文化や魔除け伝説などとも絡み、特有な信仰景観を呈している。奄美諸島の民俗文化は鹿児島と比べ、相対的に沖縄民俗に親近性を持つ。現代、交通がさらに便利になり、交流は増した。近年作られた奄美諸島の石敢當は、沖縄からの影響が強く認められる。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、中国を発祥地として東アジアや東南アジアの諸国に伝播した、辟邪、魔除けのために家の前面や路傍に祀られた「石敢當」の伝播のプロセスを、中国本土以外で最も多くの「石敢當」が分布する日本の旧薩摩・琉球地方を調査・研究の対象地にして、その経路と受容の歴史、および現状を明らかにする目的のもと、発祥の地、福建省と山東省、また日本の沖縄、鹿児島県に所在する周知の「石敢當」を直接現地に訪ね、また関係する史資料を博捜し現時点での集成をはかった。その上で、伝播経路を検討、当該地での受容の経過と信仰内容を比較し、「石敢當」の一次的性格をまず明らかにし、その後に派生した信仰内容の分析から「石敢當」の示す民族性、民俗性（地域性）を論じたもので、その史資料集成の折の実際上の労苦から史資料批判を通しての客観化まで、立論の根拠を具体的に提示したことは、他の研究者も追検証することができ、本論文の最も評価すべき点として第一に評価するところである。

第二には、筆者は自身の郷里、山東省泰安市岱岳区西南望村の悉皆調査から、「石敢當」には、「石敢當」と「泰山石敢當」の二種の刻銘があること、その疑問の解明を志す「郷土研究」の立場から始発し、徐々に調査・研究領域を広げ「比較民俗研究」至る分析も具体的で、納得できる。第3には、「石敢當」を信仰民具としての視角から、素材や形態にも注目したことである。そこから、奄美諸島には、琉球風の「石敢當」や薩摩藩内の山川産石材を使った古い「石敢當」が残存することを指摘し、奄美諸島における琉球・薩摩文化の影響を具体的に論じる。また、現場で実物に触れながら、琉球では自然石を用い、薩摩のものは将基型（屋根型）が多く、九字が刻されるのは奄美独自といえることなど、その地域性を指摘する。

このほか本論文には、論文の体裁から分析視角、個々の指摘まで評価すべき点は多々あるが、さらに、内容的に補い、深化させるべき点、また言及の欲しい点もある。

まず、対象地域とした、東シナ海沿岸部、日本の南西諸島、薩南地方における「石敢當」の分布

図を可能な限り詳細に提示しての読み取り、分析である。分布は人、物、情報の移動、交流の反映、結果ともいえるが、風水師などの宗教職能者、石工と石材、漢字や宗教知識の普及などとの関係もそこから展開する。特に「石敢當」と「泰山石敢當」の分布の図化は本論理解の大きな助けとなる。また、分布における空白部分は必ず説明する必要がある。今後の課題として、福建系文化の濃厚な台湾における分布の有無と信仰内容も確認して欲しいところであった。

また、僻邪、魔除けが「石敢當」の機能とすると、その起源として石の持つ属性、堅固さが基調にあることは容易に想定され、中国における靈石信仰の系譜からの言及も求められる。堅固さの象徴が勇者「石敢當」の人名として創説されたとの考証は、靈石の孫悟空への形象化などと連なる問題になるのだろうか。僻邪の力の形象化の有り方、広く分布が認められる獅子や狛犬、中国・雲南地方の瓦猫、日本・沖縄地方のシーサーとの比較の中での「石敢當」の位置づけ、特徴の解説も示して欲しかった。今後、同様に中国に起源し、日本の民俗信仰に大きな影響を与えた「庚申信仰」との比較対照から導かれる異同を通して、「石敢當」の伝播と信仰内容の特質が浮かび上がると考えられる。

何よりも、「石敢當」の特質は石と文字の組み合わせであり、その「石敢當」の文字を、石の呪力の反映と捉えるか、強者の名前と解するかにあった。そこで、最後に大きな課題として、漢民族にとって深い意味を持つ、表意文字としての漢字と不朽性を有する石の組み合わせの問題が残る。民俗信仰「泰山石敢當」として登場する泰山は、一方では中国五岳の中心、歴代王朝の皇帝自ら「封禪の儀」を執り行う神聖な山、道教の聖地でもあるが、「泰山刻石」で知られ、全山の岩壁、大岩にはすべて銘文が刻まれている。墓碑・墓誌・金石文から大きな廟にある碑林まで、漢民族の「碑文」文化の中での「石敢當」に対する、筆者による意味づけに今後期待したい。

いずれにせよ、本論文は周知の「石敢當」すべてを現地に訪ね、関係する地方志、民俗方面の文字記録を博捜し熟読、先行研究の学説整理と検討を綿密にした上で、現時点での「石敢當」研究を集成、その分析と考察を的確に行った。加えて、「石敢當」を文字資料と非文字資料としての両面から捉え、その有効性を具体的に提示したことはまさに歴史民俗資料学の論文として高く評価できる。また、口頭試問において著者に更なる質問も試みたがいずれも相応しい応答であった。その結果も合わせ、蔣明超氏に博士（歴史民俗資料学）の学位を授与することがふさわしいものと審査員一同これを認めるものである。